

## P1-048

## 保育所における発達障害が疑われる子どもへの早期介入を促進する支援に関する文献検討

欠ノ下 郁子<sup>1</sup>、木内 妙子<sup>2</sup><sup>1</sup> 神奈川工科大学、<sup>2</sup> 東京工科大学

## 【目的】

本研究の目的は、保育所における発達障害が疑われる子どもの早期介入を促進する支援を文献検討から明らかにすることである。

## 【研究方法】

医学中央雑誌 WEB 版を用いて、「保育所」and「発達障害」でキーワード検索した 127 原著論文を選出した。得られた 127 文献を熟読して、発達障害が疑われる子どもへの早期介入を促進する支援に関連した内容が記述されている 35 文献を分析対象とした。分析方法は、早期介入を促進する支援の要素として、早期に受診を促す支援と早期に受診するための支援に分け内容ごとにとめた。

## 【結果】

早期に受診を促す支援としては、「発達障害が疑われる子どもの特徴についての情報共有」「5 歳児健診の活用」「3 歳児発達調査票の活用」「発達障害が疑われる子どものアセスメント方法」「臨床心理士による発達相談」「発達支援施設における就学前診療の具体的なモデルの作成」「1 歳 6 か月児健診、3 歳児健診等でのスクリーニングの導入」「療育専門機関との連携」「園医との連携」「発達支援についての保育士研修」「特別支援学校からの巡回支援」が報告されていた。発達障害が疑われる子どもを早期に受診するための支援としては、「保護者へ発達上の課題を伝達すること」「わが子が発達障害を疑われる事実を認識できるように働きかけること」「早期に受診行動を促すこと」などの支援が必要となる。支援方法は、「保護者が自ら我が子どもの発達障害に気づくことができる親づくり」「乳児健診前の確実な保健師支援への橋渡し」「療育センターからの保育園巡回による専門職からの対応と指導」「親の気持ちに寄り添いつつ必要に応じて適時に療育施設や診断の機会に結びつける」「社会資源の活用」「関係職種との連携」が報告された。

## 【考察】

保育所における発達障害が疑われる子どもへの早期介入を促進する支援は、保育所のみならず、園医、保育所の看護師、保健師、乳幼児健診を行う医療施設、療育センター、心理士、作業療法士、特別支援学校等による支援であり、多岐に渡っていた。また、それぞれの保育所で様々な支援を工夫し実践している現状が明らかになった。今後、すべての発達障害が疑われる子どもに早期介入が行われるためには、保育所と関連機関との連携方法や保育所への支援の在り方を検討する必要が示唆された。

## P1-049

## 医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の母親の「ケア役割への拘束」－母親の就労困難についての語りの分析より－

中川 薫

東京都立大学

## 【目的】

医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の母親の就労の困難を分析することからみえてきた、母親の「ケア役割への拘束」について記述することが本研究の目的である。

## 【方法】

医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の母親で、就労経歴をもつ人 9 人に半構造化インタビューを行い、逐語録化したものをデータとし、M-GTA を用いて分析した。

## 【結果】

医療的ケアを必要とする重症心身障害児・者の母親の就労の困難が起こるプロセスを分析したところ、その背景として、母親がケア役割に拘束される状況がみえてきた。母親は、外的にも、内的にも、ケア役割に拘束される状態にあった。ここで、ケア役割への拘束とは、ケア役割から離れることが困難な状態である。まず外的なケア役割拘束についてである。外的なケア役割拘束とは、外的な条件ゆえに、ケア役割から離れることができない状態である。医療関与度の高い子はケア代替が困難であり、母親にケアが差し戻されていた。また子は絶え間ないケアが必要な状態にあり、母親はケア役割から離れることが物理的に難しく、また離れるだけの体力や時間も剥ぎ取られていた。また母親は、専門機関から子の治療に関する協働的役割を強く期待されており、母子療育への参加、頻繁な通院や医療機関による指示の家庭での実践、学校教育への参画が要請され、ケア役割から離れることは難しかった。このような外的な条件のもと、母親はケア役割に拘束されていた。また母親は、内的にもケア役割に拘束されていた。内的なケア役割への拘束とは、意識の中で、ケア役割から離れることができない状態である。母親は、子の障害に対する罪悪感や、あるいは専門職から向けられるケア役割期待を内面化することで、ケア役割から離れることを躊躇していた。このように、母親は、外的にも内的にもケア役割に拘束された状態であった。就労の困難は、それを背景として生じていた。

## 【考察】

本研究から示されたケア役割への拘束は、母親の個人としての生き方に制約を与える方向に作用していた。ケア代替の困難は、医療的ケアを必要とする重心児・者に特に強く現れる特徴だと考えられ、障害の種別による差があるであろう。また専門職に限らない周囲からのケア役割期待には地域差があることも推測される。最近注目される「ケアへ向かう力」との関係についても今後の課題としたい。